

サケをめぐる宗教的世界

一民間宗教者の儀礼生成に果たした役割についての一考察—

菅 豊

-
- | | |
|-------------------------------|--------------------|
| 1. 序論 | 5. サケの伝説にあらわれる宗教者像 |
| 2. 漁撈儀礼としてのサケ儀礼 | 6. 宗教儀礼と融合するサケ儀礼 |
| 3. 漁撈儀礼としてのサケ儀礼を取り巻く社会的
状況 | 7. 漁撈活動から遊離したサケ儀礼 |
| 4. 宗教者の関与するサケ儀礼 | 8. 宗教儀礼としてのサケ儀礼 |
| | 9. 総括 |
-

論文要旨

日本においてサケは、最も複雑な民俗を形成した魚類の1つであり、その民俗は北方文化を基盤として新たに何かを付加されたり、あるいはまったく新しいものへ形を変えられたりしながら日本特有の展開がなされてきた。本稿では北方文化から連なる文化背景を基盤として、その上に覆い被さっている日本的なサケの民俗の要素について検討し、こういった日本特有の展開、表出の問題を考えていく。具体的には、日本のサケ儀礼へ民間宗教者が如何に介在し、どのような特殊性を生成したかということが眼目に据えられている。

本稿の構成はまず4つの調査対象地域を設定し、それぞれでサケ儀礼への宗教者の関与の質、度合いを探り、その後比較検証を行う。それ故比較の叩き台とするために、第2章から第5章にわたり、1つの地域のインテンシブなケーススタディーを行う。そして、そこで導かれた問題を以て、残りの3地域を検証していくという手法をとる。このような比較検証の中で明らかにしたい課題として、第1に漁撈儀礼としてのサケ儀礼と、宗教儀礼としてのサケ儀礼の関係性の問題、第2にこの2つの儀礼に類似点、共通性を生み出した要因、第3にそれらを支えた宗教者の問題を設定している。

どのような状況のもとで漁撈儀礼は宗教儀礼と成りうるのか、すなわち漁撈儀礼が宗教儀礼へと昇華する場面の問題は、儀礼の統合化と洗練化、体系化の過程といつても良く、ここにはまさに日本の展開が現れてくるのである。独自の展開が日本内部ではどのように浸透していったかという問題もここでは問われてくるのであり、この浸透に寄与した人物が日本のサケ儀礼を日本的たらしめる大きな要因と筆者は考えている。この人物こそ、他ならぬ修驗系統の宗教論理を背景とする宗教者であった。彼らは、本来的に保持してきたフレキシビリティー溢れる呪術体系にサケ儀礼を吸収していったのである。